

テーマを中心とした学習指導案に関する一考察 (1)

— ペテルセン W. H. Peterßen の WPM モデルを中心として —

中野和光・深澤広明・高木 啓
吉田茂孝・吉田成章・渡邊眞依子

(2006年10月5日受理)

A Consideration on the theme-centered lesson plan
— Centering upon W. H. Peterßen's WPM model —

Kazumitsu Nakano, Hiroaki Fukazawa, Akira Takaki,
Shigetaka Yoshida, Nariakira Yoshida, and Maiko Watanabe

This paper aimed to explore a new type lesson plan connecting learning objectives to long-term educational aims. To this aim, we examined the W. H. Peterßen's WPM model which is close to our idea. At first, we introduce the concept and theory of WPM model. Next, we introduce the examples of lesson plan, the examples of Grundschule and Hauptschule in this paper and Realschule and Gymnasium in another paper. After these examination, we argued the educational meaning of WPM model.

Key words: Lesson Plan, WPM model, learning objective, educational aim

キーワード：学習指導案, WPM モデル, 学習目標, 教育目的

I はじめに

発表者の一人(中野)は、かつて、目標標準評価にかかわって、次のように述べた。「人格の形成にとって大切なことは、組織体にとっても、その構成員にとっても意味のある遠い大きな目標を持つことである。小さな手近な目標は、この遠い目標と関連づけられ、構成員にとっても組織体にとってもその達成の意味が感じられるものであるべきである。遠い大きな目標がなく、意味が感じられない目標による小刻みな評価は人格形成に役に立たないだけでなく、有害である¹⁾。」

本研究は、短期的直接的な学習目標だけではなく、長期的な学習目標の達成を目指すペテルセンのテーマ中心の学習指導案について検討する。この学習指導案は、WPM das Weingartener Planungs Modell モデルと呼ばれている。本稿においては、WPM モデルにもとづく授業計画の理論と具体的な学習指導案について検討してみたい。

II 学習理論的教授学の授業計画論

現代ドイツの授業計画のモデルとして、ペテルセンは、その『授業計画ハンドブック』(1982, 2000)の中で、次の8つをあげている。

(1) 教授学的分析, (2) 授業計画のための「視点図式」, (3) 「ベルリン学派モデル」, (4) 「ハンブルクモデル」, (5) 学習目標志向授業計画, (6) 開かれた授業計画, (7) 生徒志向授業計画, (8) 「構成」的授業計画, の8つである²⁾。ペテルセンは、ベルリン学派(学習理論的教授学)に属する。学習理論的教授学は、社会的文化的前提と結果, 人間学的心理学的前提と結果という枠組みの中で、授業の意図, 内容, 方法, メディア, を分析して、授業を計画することを特徴とする。

Ⅲ WPM モデルにもとづく授業計画と具体的な学習指導案

WPM モデルによる授業計画の全体図は図1のように表される。

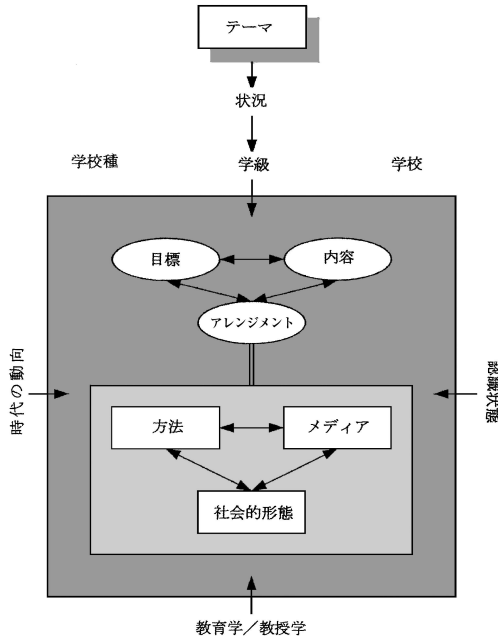


図1 WPM モデルにもとづく授業計画の全体図³⁾

ペテルセンによれば、WPM モデルは、長年にわたる授業計画の理論と実践の相互関係の中から生まれたものである。通常、授業はテーマから始まる。計画の核は、目標、内容、方法、にかかわる3つの問題設定(いかなる目標設定が追究されるべきか、いかなる内容が取り扱われるべきか、いかにその授業は配列されなければならないか)の下でテーマを適切な決定ができるまでに熟慮することである。

1 計画領域

計画領域は、①テーマ、②状況、③目標、④内容、⑤アレンジメント、からなる。

①テーマ

授業の中で、このテーマは、何のために、取り扱われなければならないか。

テーマは教育学的に意味があり、明確に述べられなければならない。

②状況

いかなる条件の下で、その授業は行われるのか。

学校種、学校、学年、学級、教科、時代の動向、認識状態、教育学/教授学

③目標

何をめざしてその授業は行われなければならないか。

- ・目標は、正当的なものでなければならない
 - その学校種の課題と合致しているか
 - その学校の条件で、実行できるか
 - 生徒たちにその正当性を説明できるか
 - 教育学/教授学に助言を求めることができるか
 - 時代の動向から見てその目標設定はどのようにとらえられるか
- ・目標は決定されなければならない
 - いかなる知識が獲得されねばならないか
 - いかなる技能が習熟されねばならないか
 - いかなる態度が受け継がれなければならないか
- ・学習目標の実質的要素と形式的要素

実質的要素-「堤防づくりの知識」という学習目標は、「堤防」という実質的要素を含んでいる。

形式的要素-学習者にとってその実質的要素はいかなる質を目指されているか。単なる記憶か、応用をめざしているのか。このことは授業計画の中のアレンジメントのあり方とかかわっている。

- ・目標は秩序づけられなければならない
- ・目標は定式化されなければならない

④内容

授業において何が取り扱われなければならないか。

内容にかかわって3つの課題がある。

- ・専門的知識
- ・内容の選択
- ・選択された内容によって一定の結果が得られるか

⑤アレンジメント

授業はどのように構成されねばならないか。

- ・方法
- ・メディア
- ・社会的形態⁴⁾

以上が、計画の5つの領域である。

2 計画の補助

WPM モデルの理論的説明は、この「計画の補助」のなかでうかがうことができる⁵⁾。

①テーマ：キーワード「教育学的意味」

教育学的意味について、ペテルセンは、クラフキーの3つの問いをあげている。

問い1：範例の意味

問い2：今日の意味

問い3：未来的意味

② 状況：キーワード「時代の動向」

時代の動向としてペテルセンは次のことをあげている。

生活形態と社会関係の多元化

あたらしい技術による世界の変化

環境問題

住民人口の発展と移民

生活状況の国際化

価値観の変化

③ 目標：キーワード 外的照合 「行為能力」

授業は短期的な学習目標だけではなく、長期的な人格促進的な目標の達成を目指すべきである。

内的照合—目標、内容、アレンジメントの内的な調整を指す。

外的照合—社会や国家との外的な調整を指す。

この外的照合にとってキーワードは「行為能力」である。

「行為能力」とは、状況に対応することができること、問題を解決すること、自主的独自のであること、である。ペテルセンは、行為能力を次のような具体例をあげて説明している。

家を建て、その庭をどうするかに関心を持っている人を想像してみよう。庭に関心があるということは彼の人生におけるある状況である。彼が、この状況に対応することができるのであり、自主的に問題を解決するとき、彼は行為能力があると呼ばれる。

行為には熟達した行為や自動化した行為があるから、ここで言う行為とは、それらと区別された計画的行為である。このような、状況に対応することができ、問題を自主的独自の解決しうる行為能力の形成を授業は目指すべきであるとするのが WPM モデルの特徴である。

④ 内容：キーワード 全体的統合的

「行為能力 (Handlungsfähigkeit)」

ペテルセンによれば、教科内容の選択においてもこのような行為能力の形成が考慮されて選択されなければならない。この場合、行為能力は図2のような、4つの能力 (Kompetenz) の関わりから成る全体的統合的なモデルとしてとらえられる。

⑤ アレンジメント：キーワード 「完全な学習」

ペテルセンは、自己主導的学習がもたらされる学習環境を整備するためのモデルを提案している。自己主導的学習は、1. 導入、2. テーマに沿った新しい情報の獲得、3. 長期的な独自の把握ができるようなその

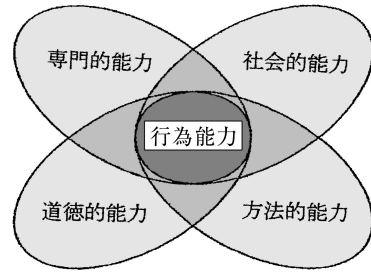


図2 行為能力の全体的統合的モデル⁶⁾

情報の蓄積、としてとらえられる。このようにとらえられた自己主導的な学習を導くための教授モデルは、図3のように表現される。

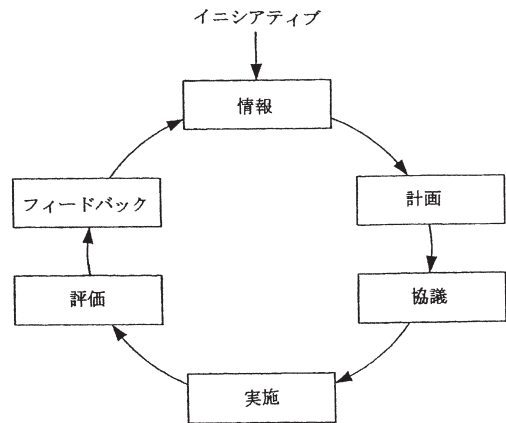


図3 自己主導的な学習を導くための教授モデル⁷⁾

この図において、イニシアティブは、つねに生徒からというわけでない。また、生徒がつねに自主的に学習しなければならないというわけでもない。すべての学習がこのモデルの順を追って行われなければならないということでもない。

3 WPM モデルの理論的意味

WPM モデルの理論的意味について、ペテルセンは、次のように述べている⁸⁾。

WPM モデルにもとづく授業は、情報の獲得を越えて、すべての学習指導計画が、外的照合を追加することを志向する。それは、つねに何かを学習させるといった目的だけではなく、それを習得させ、すべての授業において上位にある目標—行為能力—を獲得させるような目的を追求する。あらゆる授業がこのような行為能力を促進するわけではない。しかし、あらゆる授業が短期的な学習目標を越えて、行為能力を促進しないか点検すべきである。

WPM モデルは、庭づくりの比喩にうかがわれるように、状況に対応できており、問題を自主的に独自に解決する行為能力の形成をめざした学習指導案づくりのモデルである。それは、他の形式の学習指導案を否定するものではない。行為能力の形成を目指している点は、クラフキーの自己決定能力、共同決定能力、連帯能力を思わせる。

(中野和光・深澤広明)

IV 具体的な学習指導案 (1) — グルントシュレー／国語： 「11語詩 (Elfchen)」⁹⁾

1 授業の基礎情報

期 日：2002年7月17日
時 間：第4時限 (10:15~11:00)
教 師：Sabrina Klement
(企画チーム) Melanie Ramsperger
Lea Haselwander
Martina Kraus
Susanne Haller

養成教師：Jさん

学 校：Kuppelnaushule Ravensburg

学 級：4年a組

教 科：国語 (ドイツ語)

テ マ：夏をテーマにした11語詩

学習目標：生徒が11語詩という詩の型式を知り、自主的に11語詩を書く。

2 授業の構想

(1) テーマについて

この授業のテーマとなっている、11語詩は前もって規定されている型 (Schema) に従って配列された11の語から成り、韻をふんでいない詩と説明されている。

<11語詩の型>

<11語詩の例 (生徒の作品) >

Golden	黄金色
Der Sand	それは砂
Am weiten Strand	広い浜辺で
Ich baue große Sandburgen	私は大きな城を作る
Urlaub	休み

何かある文章を書くということには、知的生産手段として創造的な思考法・行為法を生み出すという機能が存在している。さらに、「11語詩」という規定のある文章を書かせることで、書くことに対する負担を軽減させることが意図されている。

(2) 状況と条件について

本授業の計画されている4年a組には、15人の女子と8人の男子、合計23人の生徒が在籍しており、6人のドイツ人と17人の外国人が共に学んでいる。

全体として、生徒たちはよく拳手をし、集中して授業についてこれており、授業に能動的に参加できている。4年生が終わった後、次の学校へ進学することが決まっているので、多くの生徒は成績向上への高い切迫感のもとにいる。しかしながら、学級内の成績格差は大きい。

(3) 目標について

目標は、「生徒が11語詩という詩の形式を知る」こととして、設定されており、具体的な下位目標として、生徒がしなければならないことが以下のように挙げられている。

- ・夏というテーマに関する語を挙げること
- ・集められた語 (もしくは「新たな」適切な語) から適当な語を一緒に挙げ、そこから意味のある11語詩を形作り、シート上の型のなかに記入すること
- ・集められた語や自分のアイデアから成る11語詩を、一つ作業用紙に書くこと
- ・自分の11語詩の朗読を黙読で練習すること
- ・自分の11語詩を朗読すること
- ・「笑顔カード・無表情カード」を使って、朗読された11語詩を評価すること
- ・既にかけていた11語詩もしくは新しい11語詩を飾り付け用紙へ書き、これをさらに飾り付けること
- ・事前に与えられた決まりのなかで創造性を発揮できるように、詩を表現する試みを通して、言語・詩の規則・短詩の規則といった材料的障害 (Materialwiderstand) の扱いに慣れること

(4) 内容について

第一の観点：専門的能力

- ・(11語詩という形式から) 考えられる多くのものから一つを決定するという、これを作品として仕上げる、本質的なものに限定すること
- ・(書くという創造的方法から) 書くことへの動機や喜び、想像力や言語表現に対する感受性

第二の観点：社会的能力

- ・初めに11語詩を学級全体で書く際、会話のルール (拳手をする、他の人に話をさせる) を考慮し守ること、

- 妥協のかまえ（ある語へ合意する）に習熟すること
- 互いに評価する際。建設的な批判を表現すること、侮辱したり傷つけたりしないこと
- 表現された批判を受け入れ、その批判によって正しく書き換えること
- 11語詩を好む生徒には、クラスの前に登場し、自分の11語詩を朗読することも可能である

第三の観点：道徳的能力

- 対象への注意深い関わり

第四の観点：方法的能力

- 非言語的合図に対する反応
- 辞書の取り扱い

(5) アレンジメントについて

本発表のなかでも既に言及したとおり、アレンジメントは、「方法」「メディア」「社会的形態」という3つの側面から捉えられているが、ここでは「方法」に焦点を当てている。「メディア」および「社会的形態」については、「3 指導計画」を参照いただきたい。

<導入>

教師は黒板をさっと開け、夏の絵を生徒に提示する。生徒たちが絵をゆっくり落ち着いて観察できるように、教師は待った後に、夏というテーマについて思い浮かぶ語を挙げるという課題を与える。挙げられた語はクラス全員で黒板に書かれる。

この段階では、「方法的能力」の「非言語的合図に対する反応」の他、「専門的能力」の「書くことへの動機」が重視されている。

<解釈／例示>

11語詩の型を OHP で示し、生徒に、いかに11語詩が作られるかの情報を提供する。黒板と一緒に書いた単語を使って、学級全体で一つの11語詩が書かれる。

この段階では、「社会的能力」の「会話のルールを守ること」等の獲得が意図されている。

<演習>

生徒全員に、夏の11語詩の一つ書かねばならないという作業任務を与える。生徒は全員、個別作業で自分の11語詩を、前もって決められた構造が書かれた作業用紙に書く。

この段階は、「専門的能力」の他に、「方法的能力」の「辞書の取扱い」と関連している。

<詩の朗読>

生徒は、2、3人、前に出てきて、自身の11語詩を朗読することができる。笑顔の描かれたカードおよび無表情な顔が描かれたカードで、他の生徒は、朗読された11語詩が良いかあまり良くないかを述べることができる。

この段階は、相互評価を含んでいるため、「社会的能力」の多くの内容と関わっている。

<用紙の飾りつけ>

クラスメートからの評価を受けて、自分の11語詩を修正・変更し、最も出来の良い11語詩をカラフルな飾り付け用紙に書き換え、飾りつける段階である。

「社会的能力」に加えて、「専門的能力」の「作品として仕上げること」などの獲得がのぞまれている。

3 指導計画

段階／時間	教授－学習活動	社会的形態	メディア	留意点
導入 11:05-11:15 (10分間)	教師は子どもを迎える。 黒板に貼られている夏の絵は、無言の刺激として用いられる。→生徒は思い浮かんだ語を言う。 教師は集められた語を黒板にメモする。	開かれた 一斉授業	黒板 夏の絵	絵は動機づけに役立つ。 発言に挙げた語は品詞によって分類される。
解釈／例示 11:15-11:23 (8分間)	11語詩の構造がシートに示される。 →会話のなかで、11語詩は説明される 生徒は話を挙げ、その語から、1つ11語詩が例としてシートに出来上がり、ある生徒によって一緒にメモされる。	一斉授業	シート OHP	教師は正しい語の位置・語の良い配列に注意を払う。

演習 11:23-11:33 (10分間)	教師は、一人ひとりの生徒に夏という11語詩を書いても良いという作業指示を与える。 →生徒は自分だけの11語詩を書く 生徒は自身の詩の朗読を小さな声で練習することができる。	個別作業	紙 黒板 辞書	生徒は辞書の助けを借りて良い。 差異：速く進む生徒が自分の11語詩の朗読を練習している間、教師は困難な生徒を助言する形で支援することができる。
詩の朗読 11:33-11:40 (7分間)	生徒2、3人が前に出て自分の11語詩を読み上げる。 生徒はカードを使って詩を評価する。 教師は生徒によって評価された肯定面・否定面や詩の朗読について話しかける。	詩の朗読	用紙 笑顔カードと無表情カード	朗読は「しなければならないこと」でなく、朗読しようという生徒のみである。 建設的批判のみを認める。
用紙の飾りつけ 11:40-11:50 (10分間)	教師が作業指示を与える。 生徒は自身の（改良された）11語詩を飾り付けられた用紙に書き写し、それを飾り付ける。 生徒は場合によっては2つめの11語詩を書くこともできる。	個別作業	用紙 カラフルな飾り付け用紙	差異：速く進む生徒はさらなる11語詩を書くこともできる。

(高木啓)

V 具体的な学習指導案 (2) —ハウプトシュレ／国語 (教科横断)：「宣伝の分析」¹⁰⁾

1 授業の基礎情報

期 日：2002年7月15日(月)／2002年7月16日(火)

教 師：Simon Leinmüller

(企画チーム) Ludwig Gmeinder

Katrin Liehner

学 校：TT校

学 年：第8学年

教 科：(社会科との教科横断の)国語(ドイツ語)

時 間：2時間もしくは3時間の授業時間

テ ー マ：宣伝の分析

学習目標：宣伝の構造、宣伝のストラテジー、宣伝の特質を知る

2 授業の構想

(1) テーマについて

子どもたちは、生活世界において日常的に宣伝に接している。宣伝は、子どもたちの購買欲求を高めるために、常に発展している。それは、単に製品の情報を

伝えるだけではなく、子どもたちが好むような感情をつくりあげる。今日、宣伝により、子どもたちは、現実との区別がつかなくなり、著名な広告メディアを体験するように、宣伝された製品の能動的な特質を得られると信じ込まされる。

こうした問題や宣伝の構造を授業において調べることは興味深いことである。しかし、宣伝の複雑性や現実の現象のために、レールプランに応じた短時間である一授業時間において実施することは困難である。この意味で、螺旋型カリキュラム内での宣伝や教科横断的な授業が有効的である。すでに、こうした内容は、グルントシュレにおいて取り扱われるように求められている。また、子どもたちの現代や未来の生活においても大きな意味を持つ。

(2) 状況と条件について

本授業は、バーデン＝ヴュルテンベルク州のハウプトシュレTT校の第8学年において実施される。状況的な条件として、次の3つの条件があげられる。第一に、州の教育計画とハウプトシュレの職業専門教育の条件、第二に、TT校の地域性、教室配置、教材器具の条件、第三に、8年C組の26人の生徒の学級状況の条件、または、本授業の対象である言葉やコミュ

ニケーションの観点から、教科としての国語とともに、テーマである宣伝から、社会科との教科横断的な授業という条件である。

さらに、WPM モデルの特徴である次の3つの条件がある。第一に、マルチメディア社会に取り組みという「時代の動向」の条件、第二に、宣伝を科学的に分析する「科学の認識状態」の条件、授業で宣伝を教授する「教授学」の条件である。

(3) 目標について

レールプランや教育計画から国語の授業内容、そして授業内容のテキストを分析する点から、社会科との結合が必要である。具体的な対象として、子どもたちはチョコレートの製品と宣伝に取り組む。こうした点で、本授業の目標は、下記のように定式化される。

- ・生徒たちは、チョコレートを評価する基準を自身で定式化すべきであり、そして根拠を、お互いに慎重に検討すべきである。生徒たちは、その作業のさい、味、包装、イメージ、目標群を考慮すべきである。
- ・順位表の作成のさい、生徒たちは、立場を明らかにすべきで、その発言を根拠的に証明すべきで、そしてその結果をプレゼンテーションすべきである。
- ・つくり上げた基準を、生徒はチョコレートについてのシートに適用すべきである。
- ・最後に、生徒たちは、つくり上げた、体験した知識を創造的に実行に移すべきで、かつ、自分自身のチョコレートを作り出すべきで、そしてこれは、学級の広告用スローガンまたは広告のメロディーを用いた広告を使ってプレゼンテーションすべきである。

(4) 内容について

テーマである宣伝は、学年段階での授業内容において多層で複雑なテーマを提供している。また、普及している文化現象としての宣伝は、学校、家庭、同年齢グループなどにおいても見られる。そうした状況のなか、授業において取り扱う宣伝の領域では、以下の内容が考えられている。

「宣伝の歴史、発展」、「何が宣伝か?」、「宣伝の形態」、「生活世界—消費世界／宣伝の現実—現実に関する区別／考察」、「宣伝の作用」、「宣伝の分析、宣伝の原則」、「誰がどのように言及されるのか? 目標群—特に、子どもたちや青少年の目標群か? 青少年の反応か? イメージの形成か?」、「どのように宣伝が知覚され、反応されるのか?」、「広告代理店における宣伝、日常、課題、職業の領域における活動フィールド」、「広告文の分析、テキスト・絵の分析、宣伝における(人間の)像、宣伝メディアの対比など」。

この授業において取り扱う宣伝の領域では、教科である国語を中心に、宣伝の構造や原則を分析する。そのさい、テーマの具体化のために、社会科の「何が宣伝か?」「広告代理店における活動フィールド、職業、経過、日常」の内容も扱い、教科横断的に国語と社会科の教科領域を結合させた内容に取り組む。

(5) アレンジメントについて

最初の授業時間では、テーマへの導入として、子どもたちは、チョコレートを持参し、日常経験から対話し、情報を共有し合う。授業者は、例えば、「どのようなチョコレートが最も良いのか?」、「どのような言葉／ブランドをプレゼントしてもらうのか? 誰から? なぜ?」という刺激を与え、基準をつくらせる。チョコレートの基準を作り出した後、その基準は、グループ作業によってその基準自体が試される。グループ作業では、様々なチョコレートの種類を分析し、グループで審議される。こうしたグループでの活動は、行為能力と関わって社会的能力を促進する。そこでの成果は、プレゼンテーションされる。

次の授業時間では、再び、基準が取り上げられ、基準の使用とチェックがなされる。その後、グループ作業においてこれまでの宣伝を批判的に検討し、グループでの宣伝を製作し、プレゼンテーションする。最後に、省察の段階が設けられ、内容的、方法的にもさらなる前進が話し合われる。

3 指導計画

第1次の時間：「現状調査」

時間	教授活動と学習活動	手段	留意点
10分	持参したチョコレートの分析／比較に関する基準をつくり上げる、例えば：味、包装、購入者たち／イメージ、宣伝、...	黒板 授業対話	基準をつくり上げる刺激と問い。 参照 部分D—レイアウト

20分	グループ作業： 基準に基づいて持参したチョコレートの「分析」。どの基準内にも、グループのメンバーの異なったチョコレートの種類が、言葉によって根拠づけられた順序に持ってこられるべきである。お気に入りのトップが選択されるべきであり、そしてその後、グループのプレゼンテーションのさい、推奨されるべきである。	課題設定、チョコレート、ポスター、鉛筆、接着剤など	すべてのグループは同じ課題を持つ。しかし、グループの成果とプレゼンテーションは、完全に異なる。
15分	グループは、そのチョコレートのお気に入りのプレゼンテーションする。	形成されたポスター	

第2次の時間

時間	教授活動と学習活動	手段	留意点
15分	(チョコレートのための) 広告の観察と記述。前日につくり上げた基準の使用と検査—場合によっては、新たな基準を付け加える。	前日の基準のカatalog (ポスター、または、黒板に書くこと)	→ 宣伝の原則
30分	宣伝との生産的、創造的つきあい： 生徒は、新たなブランドを、名前、イメージ... を用いて発明すべきである。生徒は、可能な「包装」を考え出すべきであり、ならびに宣伝を形成すべきである。 このさい、あらゆることが考えられる：ラジオ、テレビ、新聞の宣伝、メロディー、演出、... グループ作業は、おそらくさらに2時間を必要とする。 成果のプレゼンテーションは、ショーや展示において考えられる。	筆記用具、ペイントセット、雑誌、ラジオ、投影機など	生徒がその製品を演出したいように、生徒に任せておく。 教師は助言し、支援する。

(吉田茂孝)

【引用文献】

- 1) 中野和光「知識経済下における学力と評価の問題」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部（教育人間科学関連領域）第53号、2006年3月、19-24ページ
 - 2) Wilhelm H. Peterßen: *Handbuch Unterrichtsplanung*, Oldenbourg Schulbuchverlag, (1982, 2000).
 - 3) Wilhelm H. Peterßen: *Lehreraufgabe Unterrichtsplanung*, Oldenbourg Schulbuchverlag, 2003, S. 9.
 - 4) Ebd., Ss. 12-27.
 - 5) Ebd., Ss. 28-64.
 - 6) Ebd., S. 46.
 - 7) Ebd., S. 56.
 - 8) Ebd., Ss. 65-70.
 - 9) Ebd., Ss. 80-94.
 - 10) Ebd., Ss. 109-126.
- 本論文は、日本学校教育学会第21回大会（2006年8月5日 広島大学）自由研究発表のレジメにもとづいたものである。